

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：32821

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K01151

研究課題名(和文) 看護系大学の看護教員の授業力量と成長課題 - 授業リフレクション研究を通じて -

研究課題名(英文) Nursing College Nursing Instructor Instructional Competence and Growth Issues: Through Instructional Reflection Research

研究代表者

神原 裕子 (Yuko, Kambara)

東京有明医療大学・看護学部・教授

研究者番号：00433665

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：看護系大学の看護教員4名の授業リフレクション研究における対話リフレクションの分析から、4名それぞれの教員の授業の実態と成長課題の一部を明らかにすることができた。これらは研究対象の授業の範囲で得られた結果という限界があるものの、本研究の目的に即して看護教員に共通する課題を考察し、自分自身の授業の実態を客観的に見る経験の少なさ、学生の実態、教員の信念を反映した授業デザインの難しさ、の2点が推定できた。

今回、対象となった看護教員は4名と少なく、さらに研究成果を積み重ねていく必要がある。さらに、対話リフレクションでは、どのような対話が気づきを促すのか、を明らかにすることも課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護系大学の看護教員の授業について、授業リフレクション研究を通じて個別具体的な授業の実態と教員の成長課題を明らかにした研究は希少である。加えて、看護教員の授業の改善に資する情報を示す意義がある。

研究成果の概要(英文)：Dialog reflection analysis in the instructional reflection research of four nursing college nursing instructors partially identified the respective instructional state and growth issues of the four instructors. Although the research was limited due to the results being obtained within the scope of the instruction that was the subject of the research, by considering the issues had in common among the nursing instructors, the author was, in line with the objectives of the research, able to infer the instructors (1) had little experience objectively viewing the state of their own instruction and (2) it is difficult to design instruction that reflects the state of the students and views of the instructor.

This time, only a small number of nursing instructors were used as the subjects of this research, so further research results need to be accumulated. A further issue is the need to clarify what kind of dialog promotes awareness during dialog reflection.

研究分野：教育工学、教師教育

キーワード：看護系大学 看護教員 授業リフレクション研究 対話リフレクション 自己リフレクション 授業の改善 気づき 授業の信念

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

看護系大学が担う看護師養成教育の課題は、看護教員と看護学生双方の課題が社会の変化の中で相互に関連しあって浮かび上がっている。

看護学部および看護学科を有する4年制大学は、1989年(平成元年)にはわずか11校であったが、2000年(平成12年)においては84校、2016年(平成28年)現在241校(文部科学省, 2016)にまで急速に増加した。このように看護師養成の大学教育化が急速に進展した背景には、教育の質を高め、より専門性の高い能力をもつ人材育成を促進する意図があったと考えられる一方、教員不足や教員の質の低下が指摘されている(文部科学省, 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告, 2011; 日本看護系大学協議会, 教育体制充実のための看護系大学院における教育者養成に関する調査研究報告書, 2013)。

さらに、近年わが国は大学への全入時代が続いているが、看護系大学の中には偏差値が40を下回る学生(河合塾Kei-NET)が入学する場合があります。学習意欲の低い学生も少なくない。大学教育とはいえ、現実には多様な学生の学習ニーズに添った教育が求められており、田口(2012)が述べる「教育の論理」への移行が必然の時代になりつつあるといえるだろう。折しも、次期学習指導要領改訂の方向性(文科省, 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめポイント, 2016)において「『社会に開かれた教育課程』の実現」が提案されているが、高大接続改革をふまえ、将来のよりよい看護を担う人材育成もまた社会に開かれた教育課程を実現する必要がある。すなわち、「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」を明らかにし、生涯学び続ける専門職としての人材育成をめざす改革が求められている。

上記の課題に対するわが国の看護教員の成長に関わるこれまでの研究は、成長を促す要因の分析(平野他, 2010)、能力の評価(小林他, 2015)、組織的なFD活動のガイドラインやマップ作成(日本看護系大学協議会, 2011, 若手看護学教員のためのFDガイドライン作成, 2011; 和住他, 2013, FDマザーマップの開発)があるが、個々の教員が抱える個別具体的な授業の課題を取り上げ、改善する、いわゆる授業研究は、吉崎・蔵谷(2015)による実践事例報告や永井・岩波(2014)の「授業リフレクション研究」などに限られる。また、国外の研究では、教育プロジェクト、プログラムの評価研究や教員の行動や能力の分析研究、看護教員の重要な特性や傾向を調査した研究が大勢で、記述的研究(Johnson-Crowley N 2004)やアクションリサーチ(Rossi EA, 2002)はごくわずかである。したがって、国内・外のいずれにおいても、とりあげた個々の授業事例に即して教師の成長課題を明らかにし、デザインからリデザインに至る過程と結果を踏まえた考察は希少である。

このような状況をふまえ、本研究では授業力量の向上と看護教員の成長に資する成果を蓄積するために、澤本(1996, 2016)が提唱する「授業リフレクション研究」を提案する。「授業リフレクション研究」は、授業のデータ(画像、記述)をもとに自己リフレクション、対話リフレクション、集団リフレクションを重ねて、授業の改善のみならず教師としての成長を促すものである。このねらいは、吉崎(2012)による授業研究の4つの目的、すなわち、授業改善、カリキュラム開発、教師の授業力量形成、授業についての学問的研究の進展、とも一致する。そもそも「リフレクション」は、デューイにより「そのひとの信念の根拠を評価すること」と定義され、「省察・熟考」と訳されることが多い。近年、ドナルド・ショーン(柳沢・三輪訳, 2007)の「省察的实践」が専門家として重要な意味をもつことが認知されるようになったことに伴い、専門家としての教師が自らの授業を探求するプロセスを対象とする研究の重要性は高まっている。

「授業リフレクション研究」は、すでに小学校、中学校、高等学校での実践研究において、授業改善や教師の授業力量の向上、成長の成果が報告されている(澤本, 2005 他)ものの、大学の看護教員にも同様の成果が期待できるかについては、研究を通じて明らかにする必要がある。看護学の専門家である看護教員は、自らの看護実践の中で省察(リフレクション)的实践を暗黙的に積み重ねているため、「リフレクション」を通じた授業研究にはなじみやすいと推測される。ただし、看護実践と教育実践の対象の違いが、「リフレクション」の傾向性に差を生む可能性があり、その点は注意深く検討する必要がある。

そのうえで本研究の範囲で明らかにすることが可能なのは、看護系大学の看護教員の授業の実態を明らかにする、看護教員の成長課題と解決の方向性を示す、ことの2点である。

田口(2012)は、大学における授業研究発展の研究方法論上の課題について、「大学においてはPCK(Pedagogical Content Knowledge, 内容を効果的に教授するための知識, Shulman, 1987; 著者引用)の獲得が何よりも重要である。PCKの内容あるいはPCKの獲得過程を明らかにしていくためには、具体的な授業実践を対象とした授業過程の研究が欠かせないが、それは研究領域ごとにミクロな研究を積み上げていくほかはない。そのための研究方法論は、これまでの授業研究の方法論を援用しつつ、独自に開

発していく必要があるだろう」と指摘する。本研究が提案する看護教育における「授業リフレクション研究」は、看護学のPCKを明らかにすることにより、他の教員も参照することができる。また、同一研究方法を用いることで、すでに一定の成果を得ている学校教師成長研究成果との比較検討による看護教育における教師成長の独自性と共通性を明らかにすることができる。これにより、看護学の授業研究方法論開発にも寄与する道が得られる可能性がある。加えて、看護教員の授業力量の向上に効果が認められれば、組織的なFD活動では見過ごされがちなボトムアップのFD活動の方法を提案することにもなる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、看護系大学の看護教員による授業の実態把握とそのデザイン、実施に携わる教師の成長課題を明らかにし、その解決の方向を提案することである。

急激な看護系大学の増加に伴い、教員不足および教員の質の低下の問題が指摘されている。加えて、看護教員は授業の具体的な問題解決に資する情報が得にくく、個々の教員の成長課題に対応したリデザインの方途が得にくい。本研究は、看護職養成教育の質を担保する上で重要な看護教員の成長を確保するために、教育工学的なアプローチの授業研究を導入して、看護教員の成長を保証する具体的な方向性を提案する意図を持つ。

## 3. 研究の方法

### 1) 研究対象

授業研究に関心のある研究者の紹介を得た看護系大学教員のうち、本研究の目的を説明し、研究協力の同意を得られた看護系大学教員、とした。

### 2) 授業リフレクション研究の特徴

リフレクションは、ドナルド・ショーンにより専門職教育で広く知られるようになった考えだが、本研究では澤本(1996, 2016)による授業リフレクション研究の手法を参考に、データ収集と対話リフレクションを実施した。

澤本による授業リフレクション研究の特徴は、自己リフレクション、対話リフレクション、集団リフレクションとリフレクションを重ねて、自己を対象化することで、自己の授業の課題に自ら気づき、授業に対するより深い理解が促されることにある。さらに、本研究では、「リフレクションとは個人の内面の営みであり、外部者＝他者はそれをみだりにのぞき込むようなことはできず、あくまでも本人との協同研究者としての合意の下に、相手の内面世界を開示してもらおうという考え方を尊重する。一律の手法でリフレクションを強要し、その結果を安易に採点するような手法の持つ危険性を意識する必要がある。」(p12, 澤本他2016, 以下同様)の立場をとる。それは、「授業リフレクション研究は、リフレクションする主体である『自己』が、リアルな現実をどれだけ受け入れることができるのか、という大きな課題を担う研究である。」(p12-13)ことに拠る。加えて、授業者が特別な研究方法を習得する必要がなく、経験年数によらず「研鑽の意味をもつこと」(p24)も、本研究に取り入れた理由である。

一方で、授業リフレクション研究では、教師自身の主観性や感情によるゆらぎの影響を最小限にし、研究の信頼性・妥当性を担保するためのデータが、一層重要である。データ収集の方法は、以下に示した。

(1) ビデオカメラ2台(教室の前方、後方に固定)とICレコーダー(授業者に装着)により授業画像と音声データを収集し、研究者がプロトコルを作成した。動画の音声が聴き取りにくい部分は、ICレコーダーの音声データで確認した。

(2) 画像およびプロトコルデータを授業者に渡し、自己リフレクションを依頼した。自己リフレクションは、授業者が記述した。

(3) 画像およびプロトコル、自己リフレクションの結果をもとに、研究者A(研究代表者)が授業者との対話を主導し、研究分担者B、Cが気になった部分について随時質問や対話を進める方法で対話リフレクションを行った。授業者が学生に求めた授業の感想記録も、対話リフレクションの資料として参考にした。対話リフレクションの場所は、落ち着いて語ることが可能な静かな環境を選択した。対話リフレクションの場面は、ビデオカメラ1台とICレコーダーで画像および音声データを収集した。対話リフレクションのプロトコルは、画像およびICレコーダーから作成した。

### 3) 分析方法

澤本(1996)による授業リフレクション研究は、授業者自身の気づきを重視する(p148)したがって、対話リフレクションにおける語りの内容は、授業者の関心に沿ったメンター(研究者)との対話になるため、授業者の関心と本研究目的との関連を踏まえながら慎重に分析方法を決定する必要がある。その手続きは以下に示した通りである。

(1) 対話リフレクションのプロトコルを熟読し、授業者が捉えた授業の実態とそこにおける課題、授業者の気づきや改善策を表す文章あるいは段落を抽出し、授業者の対話の意味内容を壊さないように要約した。

(2) 要約した文章を、意味の類似性により分類し、カテゴリー名を付与した。さらにそれらのカテゴリーは、授業のどのような課題を表すのか検討した。

(3) 信頼性および妥当性を確保するために、プロトコルの熟読から抽出部分の文章の要約、カテゴリー化と命名の過程において、研究者3名でディスカッションし、意見の一致をみるまで検討した。

#### 4. 研究成果

本研究への協力が得られた看護系大学教員は、4名(下記表を参照)だった。研究目的には賛同が得られても、協力を依頼した大学の諸事情により協力が得られない場合があり、当初の計画よりも少ない研究対象数となった。4名の看護教員の対話リフレクションのデータを分析、考察した結果の概要を以下に述べる。

表1 研究対象者および授業科目と単元

	性別	教員経験	授業科目	単元
A教員	女	3～4年	公衆衛生看護学概論	国際保健活動と保健師活動
B教員	女	15年	基礎看護学演習	シーツ交換(2人で行う方法) 演習
C教員	女	20年以上	フィジカルアセスメント	筋・骨格系のフィジカルアセスメント
D教員	女	20年以上		演習
D教員	女	20年以上	看護援助論	洗髪 演習

##### 1) A教員

A教員は、2年度にわたり同一単元を繰り返して授業リフレクションを行った。初年度は、教員経験3年目だったが、授業を担当するのがほぼ初めてで、授業リフレクション研究に取り組んだ。対話リフレクションの分析から得られたカテゴリーは、「学習内容と学生の興味、理解とのギャップ」、「専門知識の理解を促す説明方法の工夫の必要性」、「学生の反応を予測し、授業を構成する必要性」、「学生の立場を尊重する関わり」、「看護の実践家としての信念と教えることとのギャップ」の5つのカテゴリーを明らかにすることができた。これらのカテゴリーは、看護教員が認識する授業の実態とともに、看護の専門的な知識と学生の興味、関心、理解をつなぐ授業デザインにおける課題を示していると考察した。

教員経験4年目の2年度目の授業リフレクション研究における対話リフレクションの分析結果から、「学生の反応の把握と授業の課題の認識」、「前年の課題を踏まえた修正」、「学生の反応を踏まえた授業づくりの重要性への気づき」、「リフレクションによる授業改善の実感」の4つのカテゴリーが明らかになった。初年度と比較し、授業改善の認識を深め、学生の反応に注目する態度が明確に現れていた。

授業リフレクション研究は、A教員のように同一単元の授業を繰り返してリフレクションすることで授業の改善と教員の力量の向上をめざすことを目的とするものであるが、学生の反応を踏まえた授業づくりの重要性を認識し、改善を自覚できたことは、目的に沿った研究成果を得た可能性がある。また、A教員の成長課題は、学生の反応を授業づくりに十分反映していなかったこととも言えるだろう。

##### 2) B教員

B教員は、授業リフレクション研究に取り組んだ単元を、翌年度から担当しなくなったため一度だけの授業リフレクション研究になった。対話リフレクションの分析結果から、「学生の反応を十分把握せずに授業を進めたことへの気づき」、「学生の理解を促す説明方法の課題への気づき」、「演習のふり返りを授業に組み込む必要性への気づき」、「自身の指導方法の再認識」、「演習時の学生への指示の明示性の見直し」、「学生自身の気づきや思考を重視する教師の信念」の6つのカテゴリーが明らかになった。B教員は、自身の授業の課題を自覚することができ、中でも学生への「指示の明示性」を大きな課題として認識していた。普段は自覚的ではない信念も明示的に語られた。

B教員は、学生が自ら気づくことや思考を深めることを重視するために、学生への指示をあえて控えるようにしていた。しかし、指示の有無は学生の気づきや思考を阻害することと必ずしも連動しない。むしろ、学生の学習段階によっては、丁寧な指示をすることが気づきや思考を促す基盤になることも想定できる。B教員の信念にもとづく指示を控える指導は、授業リフレクションを通じて見直すきっかけを得ることができたといえる。しかし、どのような指導方法が学生の気づきや思考を促すのか、明確になっておらず、それがB教員の成長課題となる。

##### 3) C教員、D教員

C教員とD教員が授業リフレクション研究に取り組んだ翌年には、カリキュラムの進行に変更があったため、本単元の授業リフレクション研究は単年度の取り組みとなった。2名の対話リフレクションの分析結果から、「指導方法への気づき」、「自身の指導方法の認識」、「教員の考えで進めていたことへの気づき」、「看護の本質を伝える授業の実現への悩み」、「演習における教員間の指導内容の共有の重要さ」の5カテゴリーが明らかになった。C教員とD教員はともに20年以上の教育経験をもつ、いわばベテラン教員であり、5つのカテゴリーには日常的な授業の探求を背景に抽出されたものと考えられる。すなわち、看護の本質を伝える授業を求めて、真摯に自身の授業と向き合い、工夫を重ねる教師像を表しているといえよう。

C教員とD教員は、演習における教員間の指導内容の共有の重要さを指摘していたが、ベテラン教員がもつ看護の実践知を演習形式の授業の中で複数の教員とどのように共有することが可能なのか、という課題を示唆している可能性がある。

##### 4) D教員

D教員は、1回目とは異なる単元の授業リフレクションに1名で取り組んだ。対話リフレクションの分析結果から、「授業の進行に影響を及ぼした要因の認識」、「デモンストレーションにおいて具体的な部分の指導を重視」、「学生の実施経験をサポートしながら理解を促す指導を重視」、「他者の反応から得る気づきを促す指導を重視」、「演習時の役割経験のフィードバックから学ぶ意義を重視」、「学生の自己学習と授業の関連付けの活用効果を認識」、「学生の学びを中心にした指導を意識」、「テクニックの習得にと

どまらない応用可能な原理・原則の習得を重視」、「看護の対象の存在を意識した技術の習得を重視」、「演習指導における教員間の指導方針の共有の困難さ」の10カテゴリーが明らかになった。

D教員はベテラン教員だが、自身が重視している指導方法や課題を改めて確認できたと考えられる。一方、授業に対する信念が多く語られたが、その信念の根拠を引き出すことに課題を残した。この点は、研究方法上の課題として、今後検討を重ねる必要がある。

表2 4名の教員の対話リフレクションのカテゴリー

	A教員	B教員	C・D教員	D教員
初年度	学習内容と学生の興味、理解とのギャップ	学生の反応を十分把握せずに授業を進めたことへの気づき	指導方法への気づき	授業の進行に影響を及ぼした要因の認識
	専門知識の理解を促す説明方法の工夫の必要性	学生の理解を促す説明方法(言葉の使い方、例示、場面の切り替えなど)の課題への気づき	自身の指導方法の認識	デモンストレーションにおいて、具体的な部分の指導を重視
	学生の反応を予測し、授業を構成する必要性	演習のふり返りを授業に組み込む必要性への気づき	教員の考えで進めていたことへの気づき	学生の実施経験をサポートしながら理解を促す指導を重視
	学生の立場を尊重する関わり	自身の指導方法の再認識	看護の本質を伝える授業の実現への悩み	他者の反応から得る気づきを促す指導を重視
	看護の実践家としての信念と教えることとのギャップ	演習時の学生への指示の明示性の見直し	演習における教員間の指導内容の共有の重要性	演習時の役割経験のフィードバックから学ぶ意義を重視
2年度	学生の反応の把握と授業の課題の認識	学生自身の気づきや思考を重視する教師の信念		学生の自己学習と授業の関連付けの活用効果を認識
	前年の課題を踏まえた修正			学生の学びを中心にした指導を意識
	学生の反応に合わせた授業づくりの重要性への気づき			テクニックの習得にとどまらない応用可能な原理・原則の習得を重視
	リフレクションによる授業改善の実感			看護の対象の存在を意識した技術の習得を指導 演習指導における教員間の指導方針の共有の困難さ

### 5) 研究成果のまとめ

各教員の授業リフレクション研究における対話リフレクションの分析から明らかになったカテゴリーは、個々の教員の授業の実態を反映し、個々の成長課題を示していると考えられる。したがって、これらは4名の教員の授業の範囲で得られた結果と捉えることが適切である。ただし、本研究の目的に即して看護教員に共通する課題を考察し、自分自身の授業の実態を客観的に見る経験の少なさ、学生の実態、教員の信念を反映した授業デザインの難しさ、の2点が推定できた。

については、4名の教員全員が、ビデオ画像で自分自身の授業を見て、授業の進め方や指導方法に関する詳細な気づきを得ていたことが、その証左と言えよう。経験年数の浅い教員も中堅、ベテランの教員も、自身の授業のビデオ画像視聴により、授業の改善に資する課題を見出し得ることが考えられる。翻って、看護教員は授業を客観的な視点で「見る」経験が少ないとも考えられるため、ビデオ画像視聴をもとにした授業リフレクション研究の可能性が期待できる。

については、学生の反応に気づいていなかったこと、気づく必要性、学生にあわせた指導の必要性などの認識を4名の教員が示していたが、それをどのように授業デザインにつなげたらよいのかについては、十分語られなかった。また、教員の信念に関する認識も明らかになったが、同様に、授業デザインへのつながりは語られなかった。唯一、2年度にわたって授業リフレクション研究に取り組んだA教員は、学生の実態に合わせた授業づくりの実感を掴んだことが伺える。これらから、学生の実態や教員の信念を授業デザインにつなぐ課題が、看護教員に共通する成長課題であることが考えられる。

### 6) 今後の課題

今回、対象となった看護教員は4名と少なく、さらに研究対象者を増やしてデータを積み重ねていく必要がある。コロナ禍の渦中にあるには研究継続が困難だが、いずれ機会が訪れれば研究を継続する必要がある。また、授業リフレクション研究における対話リフレクションでは、メンターの役割が重要となるが、どのような対話が気づきを促すのか、を明らかにすることも課題である。

#### <主要引用文献>

ドナルド・ショーン、柳沢昌一・三輪建二監訳(2007)省察的实践とは何か プロフェッショナルの行為と思考、鳳書房。

澤本和子・お茶の水国語研究会(1996)わかる・楽しい説明文授業の創造 授業リフレクション研究のススメ、東洋館出版社。

澤本和子・授業リフレクション研究会著・編集(2018)国語科授業研究の展開 教師と子どもの協同的授業リフレクション研究、東洋館出版。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 神原裕子、阿部藤子、澤本和子	4. 巻 24巻 印刷中
2. 論文標題 授業リフレクション研究による教員経験3年目の看護教員の授業認知の変容、24巻第2号	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教師学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿部藤子、神原裕子、澤本和子	4. 巻 45巻 - Suppl.号 印刷中
2. 論文標題 看護系大学の看護教員の授業リフレクション研究 対話リフレクションによるジレンマと信念の認知 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 神原裕子、澤本和子、阿部藤子
2. 発表標題 看護系大学の看護教員の授業リフレクション研究 対話リフレクションから見てきたことー
3. 学会等名 第34回 日本教育工学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 神原裕子、澤本和子、阿部藤子
2. 発表標題 看護系大学における看護教員の授業リフレクション研究 対話リフレクションの分析から -
3. 学会等名 日本教育工学会 2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部藤子、神原裕子、澤本和子
2. 発表標題 看護系大学の看護教員の授業リフレクション研究 -対話リフレクションによる気づき-
3. 学会等名 日本教育工学会 2020年春季全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 神原裕子、澤本和子、阿部藤子
2. 発表標題 看護系大学の看護教員の授業のリフレクション研究 -対話リフレクションの質的分析から-
3. 学会等名 日本看護学教育学会 第30回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 神原裕子、澤本和子、阿部藤子
2. 発表標題 看護系大学における看護教員の授業リフレクション研究 -洗髪演習の対話リフレクションから-
3. 学会等名 日本教育工学会 2020年秋季全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部藤子、神原裕子、澤本和子
2. 発表標題 看護系大学の看護教員の授業リフレクション研究 対話リフレクションによるジレンマと信念の認知
3. 学会等名 日本教育工学会 2021年春季全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	澤本 和子  (Kazuko Sawamoto)  (50226081)	日本女子大学・人間社会学部・研究員   (32670)	
研究 分担者	阿部 藤子  (Fujiko Abe)  (90796161)	東京家政大学・家政学部・教授   (32647)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------